高橋博之（2016）「都市と地方をかき混ぜる「食べる通信」の奇跡」（光文社新書）

要約

これまで語られていた「地方創生」の問題点は、人口減少、高齢化にあえぎ、消滅の危機に瀕する地方をどうするかがテーマだった。だが人々の生きづらさは増し、生きる力は減退し、限界都市とでも言えるような惨状が表出している都会の方がより行き詰っているのではないだろうか。著者はこの疑問から地方と都会のいいところをかき混ぜるという考えに行き着き、東北の農業や漁業の現場を取材したタブロイド紙と、野菜や魚などの生産物をセットで届ける新しいタイプのメディア「東北食べる通信」を誕生させた。「東北食べる通信」の名物編集長が、「都市」と「地方」を切り口に、これからの農業・漁業、地域経済、消費のあり方、情報社会における生き方までを語り尽くす。

感想

今後予定されている活動の中に農業や子供食堂があることから、地方創生と食を関連させている本書を選びました。都会に住む人は田舎に憧れ、田舎に住む人は都会に憧れているという状況と、食は人間にとって最も身近な行為であることの二点から、食物を生産する地方と消費する都会を繋げる回路を作るという発想が生まれている点がとても新鮮だと感じました。また、本書では現代の消費の在り方にも触れており、消費者からの「共感と参加」が重要であることを学びました。私たちの活動について情報発信をする際にはただ報告するだけでなく、共感を得られるような発信方法を考えていく必要があると感じました。